

久米賞 佳作 受賞作品

## 猫じゃない

郡山市立郡山第三中学校

### 一人の登下校

「学校で一番大変な事は何か」  
そう聞かれたら「登下校」  
そう答えるだろう

三年とはとても長い時間だ  
……物を壊したくせに反省していない男  
……ながら歩きをして車に轢かれかけた男  
自分はそんな光景に釘付けになった  
そして電柱に頭を打った……アホらしい  
近くで寝てた猫も逃げてしまう  
思えばこの日が最初の出会いだった  
楽しい時間はすぐ過ぎるもので

でもそれはただの寝坊のせい

いつかこの学校を去る日まで  
今日も一人で登下校する

### いつもの自分

学校で久しぶりに大恥じをかい  
た  
毎回泣きたくなる「リコーダーのテスト」

その日は独り言をつぶやき帰った  
公園に寄り道しベンチに腰かける  
大きな目特徴的な茶色い小柄な猫が居る  
「あの時の猫だ」と思った

自分は猫背だが  
懐けるような人もいない  
すぐにビクツとするが  
誰かの手助けもできない  
どこか似ていて絶対違う  
そんな自分が情けない  
……この猫のようになりたい  
その日はゆっくり散歩をした

## 過去

ゲームと勉強  
遊ぶことと学ぶことだ

ゲームはすぐに飽きがこない  
だが勉強はすぐに飽きがくる  
ゲームは何にも残せない  
だが勉強は何かを残せる

「どちらを選ぶべきなのだろう」

人生は一度きり……良い方を選びたい

誰かに作られたものと自分で作るもの

時間をかけ一つの決断を出す  
固くてどこか脆いそんな決断

## 今

学校から帰りすぐにゲームをする  
ゲームで気分は上がるが成績は下がる

あの日の決断は間違っていたのだろう……

チョコレートのような

固くてどこか脆いそんな決断

どこか自分には甘かった

一度脆くなった決意を固い決意に戻す  
登下校なんかより大変に決まってる

でも自分で作るのは怖い  
だから作られたものに安心する

だったら何もしなくていい

ゲームも勉強も

そうやって今を楽しもうと思う

## 暇

遊ぶこともやめ

学ぶこともやめた今

暇になった

でも猫みたいな

寝たい時に寝て食べたい時に食べる

そういった暇でもない

どこか似ていてやはり違うようだ

今ではあの日が懐かしい思い出となっている

猫じゃないし猫じゃなくていい  
自分は自分だ

今日も暇だな……

久しぶりにゆつくり散歩でもするか

(指導教諭／柳 沼 智 恵)

中三という多感な年代だからこそその複雑な思いや、心の機微が、五篇を通して描かれている。そして自己を見つめることで得た、気づきや発見を、詩の言葉で語っている。言葉を飾らずに、素直にストレートに表現しようとしていることに共感が持てる。

(審査員／吉 井 美 香)

### 《作品の意図》

その時思ったことをその場で書いただけです。(統一性がないのは勘弁) 書いたけど何にも残ってない。自分みただな……。

1. 一人の登下校
2. いつも自分
3. 過去
4. 今
5. 暇

### 《作品の寸評》

部活動の三年間など、テーマ性を持った、散文性の強い作品が多かった中で、この作品は独自の世界観を持ち、読後も不思議な空間に立ち入ったかのような気分させられる作品であった。その空気は、どこから作られるものなのかと推察すると、具体的に説明するような言葉をあまり用いず、詩としての抽象性を高めているのが一つの要因ではないかと思われる。一篇目では、登下校の風景も、想像するしかないエピソードとして描かれている。一、二篇目に作品名とも重なる象徴的な一匹の猫を登場させ、最後の「暇」という作品では、自分と比較する対象として再登場させている。そして猫と自分を重ね合わせた「自分は自分」という結論に達していく。